

Title	恋愛至上主義の批判的検討 : 大学生への実態調査をもとに
Author(s)	藤阪, 希海
Citation	令和元(2019)年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書
Issue Date	2020-06
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/75962">https://hdl.handle.net/11094/75962</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 2019年度大阪大学未来基金【住野勇財団】学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	ふじさかのぞみ 藤阪希海	学部 学科	人間科学部人間 科学科	学年	2 年				
ふりがな 共 同 研究者氏名	かずさあい 上總藍	学部 学科	人間科学部人間 科学科	学年	2 年				
					年				
					年				
アドバイザー教員 氏名	木村涼子	所属	人間科学研究科生涯教育学専攻						
研究課題名	恋愛至上主義の批判的検討-大学生への実態調査をもとに-								
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)								

## はじめに

恋愛するにふさわしいとされる年齢になるにつれて、若者の間で恋愛に関するコミュニケーションは盛んに見られるようになる。あまり親しくない人から「彼氏いる?」「彼女いる?」と聞かれることも珍しくない。ドラマや少女漫画、映画などのメディアで恋愛や結婚の要素は必須であるといっても過言ではないし、ほとんどのティーン向け雑誌には恋愛のアドバイスや恋愛占いのページがある。今の社会で異性愛を前提とした恋愛は当たり前存在するものであり、関わらずに生きていく方が難しい。ここには異性間の恋愛が全ての人間にとって共通の幸せであるとする考え方、すなわち恋愛至上主義が存在するように思える。恋愛至上主義は心理的苦痛を生じさせることもあり、その一つにセクシュアルハラスメント、いわゆるセクハラがある。セクハラは相手の意に反して不快な性的言動をとることとされているが(伊藤, 2011, p. 151)、そのような言動のうち「いい人いないの?」など恋愛することを前提としたものは、恋愛至上主義が引き起こしていると思われる。また、「まだ結婚しないのか」「どうして子どもを産まないんだ」などの結婚や出産に関連してハラスメントとなり得る発言の背景には、近代以降に築かれた恋愛観、すなわち恋愛・結婚・性交を一体化させたロマンティック・ラブ・イデオロギーがある。

その反面、近年は若者の恋愛離れが問題視されており、2017 年に行われた青少年の性行動全国調査において、性に対するイメージを「楽しくない」「どちらかというと楽しくない」と回答した大学生は、男性で 1 割、女性で 3 割を超えており、特に女性は 1999 年の 1 割から比べると大幅に増加している。また、1993 年には大学生男女ともに約 8 割がデートを経験していたが、2000 年代に入ると減少を始め、2017 年は約 7 割と過去最低水準となっている(日本性教育協会, 2019)。

しかしながら、先に述べたように日常会話やメディアでは恋愛至上主義はいまだ存在しているように感じられ、本当に恋愛離れが進んでいるのか疑問を抱かずにはいられない。そこで、本研究では恋愛至上主義が大学生の間に蔓延しているという仮説のもと、恋愛至上主義によって生み出される思考、言動を明らかにする。さらに、恋愛至上主義が蔓延しているとすれば、それはどの程度の力をもっているのか、蔓延していないのであれば、なぜ筆者らが経験したような言動が今大学生の間でなさ

れているのかを明らかにしたい。

第1章では恋愛至上主義の成り立ち、第2章では本研究の目的と調査・分析方法、第3章から第5章ではアンケート調査とインタビュー調査から明らかになった事柄について述べる。おわりに、全体の結論を述べるとともに今後の研究課題を指摘する。

## 第1章 恋愛至上主義の誕生と変遷

### 第1節 ロマンティック・ラブ・イデオロギーの確立と恋愛至上主義

恋愛至上主義は、近代においてロマンティック・ラブ・イデオロギーが確立されていく中で生まれた概念である。よって、本研究では恋愛至上主義に中心をおきながら、ロマンティック・ラブ・イデオロギーにも着目していく。

近代以前、結婚は社会経済的な出来事であり、恋愛は結婚の外で行うものであったことを指摘する研究は多い。近代のブルジョワジーの台頭により、それまでの貴族的な文化や制度が徹底的に批判・解体されていった。その中で生殖を目的としないセックスは罪とみなされるようになり、「恋愛やそれにとまなう性的欲求は、神の祝福する結婚とは相入れない」とされた（棚沢・草野, 1995, p. 129）。恋愛は家族的、階級的秩序を乱しかねない罪深いものとして扱われるようになったのである。山田昌弘によると、その中で社会の安定を図るために考え出された戦略の一つが恋愛結婚であり（山田, 1994）、結果的に、恋愛・結婚・性交を一体化して捉えたロマンティック・ラブ・イデオロギーが生まれた。

日本において、恋愛という言葉は“love”の翻訳として明治時代につくられた。それまでも恋やいわゆる恋愛とされるような感情や行動は存在していたとされるが、その性質は大きく異なる。近代以降の恋愛は、「とりわけ特定の異性の個性に執着し対象を純化、理想化する熱情的な愛をさし、主に性的衝動に基づいて異性に対して抱かれる愛着的態度のこと」（見田, 1994, p. 932）と定義され、かつ結婚と結びつけられたものであった。恋愛結婚のイデオロギーは、結婚したいと思える相手以外にコミュニケーション欲求<sup>1</sup>を抱くことを排除し、かつコミュニケーション欲求を抱いても結婚と結びつかなければ「正しい」恋愛から排除した。この二つの排除規則は、恋愛に何か神秘的な意味があるという幻想を人々に与え、「正しい」恋愛をすることが価値あることとされるようになった（山田, 1994）。この過程をつうじて恋愛は理想化され、恋愛至上主義の考え方が生まれていった。恋愛をすることが一種の強迫観念のようになったのである。日本においては、高度経済成長期以降広まり、1959年に天皇家において恋愛結婚が行われたこともあって（明仁親王と正田美智子さんのご成婚）、1970年代以降には恋愛結婚が見合い結婚の割合を上回った。

しかしながら、この恋愛観は様々に批判されてきた。まず、元来矛盾するとされてきた恋愛と結婚を結びつけたことによって、個人の自由を保障するものであったはずの恋愛を社会制度に組み込み、その結果女性にとって「家庭生活への容赦ない隷属をもたらしていった」（ギデンズ, 1995, p. 96）という批判である。また、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの中核をなす「近代的恋愛結婚幻想」は、男女両方に対して異性は必要不可欠であり、異質であるからこそ惹かれあうのだという考えを精神面、性的領域ともに植え付けたとされる（大塚, 2001）。これに対し小谷野敦は「このイデオロギーは一方的に女だけを縛ったわけではない[...]それまで一部の『色男』や『美女』の特権だった『恋愛』が、誰にでも可能なものだという虚偽の宣伝を行った」ことが重要であると述べている（小谷

<sup>1</sup> 山田は、恋愛という感情は心理的、身体的にもっとコミュニケーションをとりたいと思う欲求を基にしていると述べている。

野, 2000, p. 16)。要するに、ロマンティック・ラブ・イデオロギーこそが、それまでは一部の人にしか求められなかった恋愛を全ての人にとって必須のものとし、できない人やしたくない人の存在を不可視化してしまったという批判である。

近代の恋愛観への批判とともに、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは終焉に向かっているという考察もなされている。ギデンズは、女性の性的な解放と自立を求める動きの中でこのイデオロギーは終焉を迎え、能動的で偶然発生的な愛情である「一つにとけあう愛情（コンフルエント・ラブ）」に移行しているとした。コンフルエント・ラブとは、異性愛に限定されない愛情であり、永続性が求められたロマンティック・ラブとは違って「特別な関係性」こそが重要視される愛情である（ギデンズ, 1995）。さらには、近年は正当性の基準が結婚ではなく恋愛そのものとなり、恋愛（愛情）の有無で結婚の正当性が図られるロマンティック・マリッジ・イデオロギーに移行したとの指摘もなされている（小林・川端, 2019）。一方で、ロマンティック・ラブ・イデオロギーからコンフルエント・ラブへの移行は単純なものでなく、様々な要素が複雑に絡みあって、今は草食化に移行しているとも言われる（中西, 2018）。また、戦後「性の日常化」が進んだこともあり、恋愛や結婚が若者にとってリスクやコストとして立ち現れる「リスク化」が進んでいるという解釈もある。現代社会では「多数の選択肢が用意されているために、望ましくない結果に陥った場合には、それを自分自身の選択の結果として引き受けなければなら」（日本性教育協会, 2013, p. 45）ず、自身の選択が生むネガティブな結果に注目するあまり、恋愛や性行動の消極化が引き起こされているのである。

## 第2節 多様化する恋愛

社会全体の動きとしては、近代の恋愛観、特に結婚や出産を巡る固定的価値観や異性愛主義を相対化し、多様性を受容する動きが少しずつ広がっている。

2018 年に行われた「青少年の性行動全国調査」では、「同性どうしの結婚は認められるべきだ」という主張を、女性の 84.2%、男性の 69.5%が肯定している。「同性と性的行為をすることがあってもかまわない」という考え方についても、女性の約7割、男性の約6割が肯定した。これらの割合は学校段階が上がるにつれて大きく増加した（日本性教育協会, 2019）。元来の婚姻制度等に見られる異性愛絶対主義を否定する傾向にあることがわかる。また、2009 年に内閣府によって行われた「男女共同参画社会に関する世論調査」では、「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」という考えに対し、20-29 歳の 87.8%が「そう思う」、「どちらかというと思う」と回答しており、結婚はすべきだという従来の考えに賛同しない人が多いことがわかる。画一的なあり方を求めず、個々の選択の自由を重視する人が増えているのではないだろうか。

メディアにも、恋愛の多様化の傾向は窺える。例えば、数年前人気を博した「逃げるは恥だが役に立つ」というドラマでは、契約結婚という形の結婚が描かれた。ロマンティック・マリッジ・イデオロギーに反する結婚の形を描いた作品だが、好意的に受け取られヒットした。「おっさんずラブ」<sup>2</sup>では、誇張しすぎず日常の中にある存在として同性愛が描かれ、こちらも世間で肯定的に受け止められている。これらは、多様性を受容しようとする社会の価値観を反映していると考えられる。

## 第3節 先行研究に内包された恋愛至上主義

ロマンティック・ラブ・イデオロギーに対しては様々な批判がなされているにもかかわらず、恋愛

<sup>2</sup> その一方で、「おっさんずラブ」が恋愛の特別性を強調するものであり、恋愛関係である限りは許される行動があるとして、理想化された恋愛像を強化してしまう側面も否定できない。

至上主義そのもの、すなわち恋愛を当然視し、それを他者にも求める考え方自体は批判の対象となつてこなかった。かつ、恋愛の概念やその実態に関する研究はこれまで多くなされてきたが、恋愛という曖昧な概念が人々からどのように捉えられているか、個々人の認識の違いに焦点を当てて調査したものは見受けられない。恋愛という概念そのものの存在や、恋愛すること自体の正当性を前提としている点で、それらの研究自体もまた、恋愛至上主義のもとで行われたものであるといえよう。

また、恋愛至上主義が原因で起こるトラブルについては、デート DV や性的暴力など、それを受ける当事者・非当事者ともに問題視するような言動は調査されてきた。しかしながら、日常的な会話の中で、ほとんどの場合発言を聞いた当事者のみが抱くような違和感や認識のずれは、問題として認識されてこなかった。広く問題だと認知されている事柄には着目する一方で、個々人が恋愛に関して抱いている苦しみについては明らかにされてこなかったのである。学問的に説明される恋愛と、社会通念として広まっており個人が存在を感じ得るものとしての恋愛との間には大きな齟齬がありながら、見過ごされてきたといえる。これまでの恋愛至上主義に基づいた研究を批判し、学問的に説明される恋愛に固執せず、現実社会で語られる恋愛に目を向けることが求められよう。

## 第2章 調査方法と分析の留意点

### 第1節 研究概要と留意点

本研究の目的は、第一に大学生の間で恋愛至上主義とされる考え方がどの程度見られるのかを明らかにすること、第二に大学生の恋愛に対する認識や行動を探ること、そして第三に社会においていわゆる恋愛とされるものが存在することによる影響を明らかにすることである。

今回の調査において、個人の体験や社会通念を通して認識される恋愛の定義を明確にすることは目指さない。第1章第3節で触れたとおり、これまで学問の中で説明されてきた恋愛の定義は現代の考え方に必ずしも合致しておらず、普遍的に使われ得る恋愛の定義の確立は不可能ではないかと推測したためである。そこで、調査方法としてアンケートとインタビューを用いたが、いずれの調査でも恋愛の定義をこちらから提示しない状態で、恋愛行動や意識の特徴を尋ねた。それにより、調査者が有する先入観をできる限り排した形で調査協力者（以下、協力者と記載）の恋愛観を明らかにし、その恋愛観が日常生活にどのような影響を及ぼしているかについて探ることを狙った。ただし、種を超えた動物、物体といった人間以外を対象とした恋愛の指向については、今なお様々な議論が交わされているところであり取り扱いが難しいので、本稿では人間を対象とした恋愛に限るものとした。自身が恋愛感情を抱いていると認識する相手を恋人、互いに恋人だと認識する間柄を恋愛関係と呼ぶこととする。

### 第2節 調査方法

#### 第1項 アンケート調査方法

先行研究や筆者らの想定する恋愛至上主義に基づく恋愛像やその分析が、どれほど現在の大学生・大学院生にあてはまるものか、また大学生によってどのように自覚されているのか明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。質問は 96 項目にわたり、①回答者自身が主体となつて行う恋愛行動および、恋愛行動への関心の有無、②回答者の周囲の人の恋愛行動および、恋愛への関心を示す行動の有無、③恋愛に内包される行動や感情の動きとその社会的理由、④同棲・出産などしばしば結婚制度と結びつけられる事柄に関する考え、⑤恋愛にまつわる男女二元論的な考えの有無とそれが反映された行動の有無、⑥法律や人間関係といった恋愛に限定されない価値観のうち①から⑤の回答に影響していると思われる事柄の 6 つに大別される。それぞれの問いに対する回答には、「そう思わ

ない」から「そう思う」まで段階別に「1」、「2」、「3」、「4」の数字を振り、その中からあてはまる度合いを回答してもらった。

アンケートは Google フォームを用いて作成し、7 月末から 9 月末にかけて実施した。紙媒体でアンケートを配布するよりも不特定多数からの回答を得られると考え、調査はオンライン上で行った。ただ、標本の抽出を行わないまま任意で回答してもらうため、恋愛に特別強い関心や思い入れがある人が回答し、結果に偏りが出るのはないかと予想された。そこで、恋愛に深く関連すると思われる要因もあわせて調査し、結果の偏りおよびその要因の認識につなげることを試みた。その一環として自認する性別を自由記述形式で回答してもらい、恋愛の指向を「異性愛（ヘテロロマンティック）」、「全性愛（パンロマンティック）」、「無性愛（アロマンティック）」、「両性愛（バイロマンティック）」、「同性愛（ホモロマンティック）」、「その他」、「答えたくない」の 7 択で尋ねた。加えて、性に関する活動や情報収集を普段行っているかについても調査した。

アンケートの配布に際しては、ポスターを制作し大阪大学の各学部・研究科掲示板に貼るとともに、授業後の教室等でポスターの縮小版であるチラシを手渡しし、アンケート回答を呼び掛けた。オンライン上では、LINE、Instagram をはじめとした筆者らの個人的な SNS アカウントやメールでアンケート回答を依頼し、スノーボール方式で回答者を増やした。また、「大阪大学の実験参加者・募集情報」という twitter アカウント（ID:@handai000）にも協力を仰いだ。

## 第 2 項 インタビュー調査方法

アンケート調査の協力者のうち、大阪梅田周辺でインタビュー調査に協力してもよいと回答した 16 人を対象にインタビュー調査を行った。手法としては、半構造化インタビューと、グループ・フォーカス・インタビューをとった。2 種類の手法をとったのは、個々人の恋愛に対する意見を評価し意見をすることがないと想定される筆者らのみが聞き手である場合と、自由な発言が想定される他の調査協力者が聞き手の場合で、話し手の言動に変化が見られると考えたためである。いずれにおいても、自由度の高い対話を通して、アンケート調査において想定されていなかった恋愛像や恋愛行動、それらの影響を探ることと、アンケート調査において明らかになった意識と言動との比較を目的とした。それに加えて、グループ・フォーカス・インタビューは会話の模擬形態をつくった実験的な場と捉え、協力者同士の会話から恋愛に関する態度を探った。他者との関わりの中で恋愛についてどのように語るのか、また他者の存在が語り方に及ぼす影響を明らかにすることを狙った。

半構造化インタビューは、9 月初旬から同月末にかけて、5 人に対してそれぞれ 60 分程度ずつ行った。恋愛をする理由や恋愛以外の感情との違い等を含め、恋愛とは何だと考えるか、恋愛に関するポジティブ・ネガティブな考えや体験、他者と自己の恋愛に対する態度の比較を中心に、恋愛に関連する事柄を自由に話してもらった。また、アンケートの質問項目において答えにくかったもの、積極的に話してみたいテーマが含まれていたかなど、アンケート調査についての感想も尋ね、調査対象者から見たアンケート調査への批判を収集した。インタビュー内容は録音し、全て書き起こした。

グループ・フォーカス・インタビューは、9 月 21 日に 2 回、9 月 30 日に 1 回、計 12 人にそれぞれ 60 分程度ずつ行った。うち 1 人は半構造化インタビュー協力者と重複する。筆者側から協力者に問いかけたことは、半構造化インタビューの際のそれとほとんど同じものとした。調査内容は全てビデオレコーダーで録画・録音した。計 3 回の調査のうち 2 回分は全て書き起こし、残り 1 回分については論文に使用する部分だけ書き起こした。

## 第 3 節 分析の留意点

## 第 1 項 アンケート調査分析

分析にあたってクロス表を作成するときには、自由記述の性別のうち「女性」「女の子」「女」「female」などは女性とし、「男」「men」「男子」などは男性とした。「バイジェンダー」、「x ジェンダー」、「性自認なし」など、性別二元論で分けられない性別、「体も心も女のはずだけど抵抗を感じる」など男女の分け方に疑念を抱いている場合は「その他」に分類した。また、恋愛指向についても「答えたくない」「わからない」は「その他」とした。

アンケート調査の回答者 610 名のうち、女性 423 名 (69.3%) 男性 158 名 (25.9%)、その他 29 名 (4.7%)、異性愛者が 75.2%、同性愛者が 1%、全性愛者が 7.9%、無性愛者 3%、両性愛者が 6.7%、その他 5.9% となった。性別ごとに恋愛

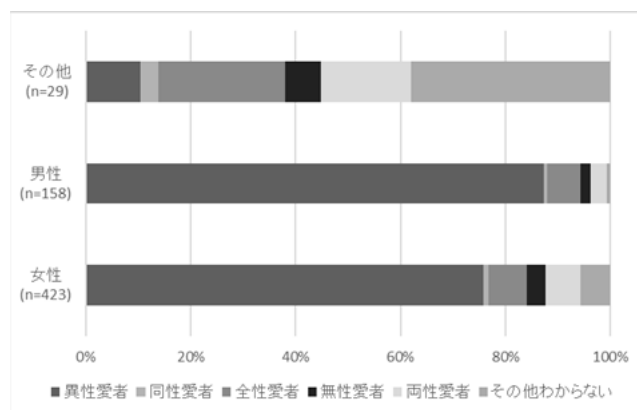


図 1 性別ごとの各恋愛指向の割合

的指向を見ると、異性愛の割合は男性が一番多く 87%、次いで女性が 76% となった (図 1)。電通ダイバーシティが 2018 年に行った調査によれば、全国 20～59 歳の 6 万人のうち、8.9% が LGBT 層 (LGBTQ+) に値したという。この数値から見ても、今回の調査協力者は従来の調査よりもかなり多様性に富んでいるといえよう。これには二つの理由が考えられる。一つ目は SNS を用いてアンケートを拡散したために回答者に偏りが生まれてしまったこと、二つ目は大学生の意識が多様化していることである。男女いずれかのジェンダーでないこと、異性愛でないことが異質だと捉えられるのではなく、自らを表す一つの選択肢としての本来の意義が強まっているといえよう。性の知識を日常的に得ている人は 6 割であった。

アンケートを作成する時点では、個人の恋愛への認識の仕方と社会にある恋愛観に大きな差異が存在することを想定していなかった。しかしながら、インタビュー調査においてその差が大きく表れたことで、アンケート調査において問いの対象が曖昧な項目があったことが判明した。例えば、「結婚した方がいい」という項目では、筆者らは回答者自身の個人の意見を想定していたものの、実際には社会でそれが正しいとされる傾向があるかないか、という捉え方で答えた可能性も否めない。そのため、意味が曖昧と思われる項目のうち、本論文の中で扱ったものは (＊) の記号を印した。

## 第 2 項 インタビュー調査分析

半構造化インタビューは計 5 回、次の表 1 のような日時に実施した。各協力者に A～E の記号を振り、性別、恋愛指向についても記している。

表 1 半構造化インタビュー調査協力者一覧

協力者	開始日時	性別	恋愛指向	表現
A	9 月 4 日 14:00	女性	無性愛	適応型
B	9 月 6 日 14:00	女性	同性愛	歓迎型
C	9 月 10 日 10:00	女性	異性愛	歓迎型
D	9 月 10 日 14:00	女性	異性愛	分析型
E	9 月 30 日 10:00	その他	その他	適応型

性別は女性 4 人、その他が 1 名であり、恋愛指向は異性愛 1 人、同性愛 1 人、無性愛 1 人、その他 1 人であった。表現については、第 4 章第 2 節で詳細を述べる。

グループ・フォーカス・インタビューの実施日時、協力者の性別は、表 2 のとおりである。なお、プライバシー保護の観点から各協力者の恋愛志向を表に記載することは避けた。

表 2 グループ・フォーカス・インタビュー協力者一覧

協力者	開始日時	性別
D	9 月 21 日 10:00	女性
F		女性
G		女性
H	9 月 21 日 14:00	女性
I		男性
J		男性
K		男性
L	9 月 30 日 14:00	女性
M		男性
N		女性
O		女性
P		女性

協力者の性別は女性 7 人、男性 4 人であり、異性愛が 6 人、両性愛が 2 人、全性愛が 2 人、無性愛が 1 人であった。インタビュー協力者は女性が多数を占めることとなった。男性と比較して女性の方が恋愛至上主義から生じる違和感に敏感である（第 5 章第 2 節参照）ため、細かな問題も明らかになったのではないだろうか。

インタビュー調査はいずれも関西圏の商業施設内にある貸会議室等で行った。日常的に会話するときよりもプライベートな関わりを持つ人が少なく、また恋愛について意見を交わすことを目的に集まっており、あまり他者の目が気にならない閉鎖的な空間であった。そのため、比較的本音で話しやすい場だったと思われる。ただし、グループ・フォーカス・インタビューにおいては同じグループになった人の考えによって、本音の話しやすさは変わったのではないかと考えられる。さらに、たとえ本音が話しやすい場であったとしても、半構造化インタビューよりも他者の目を気にしたであろうことは留意せねばなるまい。

インタビュー調査の協力者は、協力してもよいと思う程度に恋愛に関心を抱いている人であり、恋愛に興味がない人たちの恋愛行動や考えとの間に差異がある可能性は否めない。グループ同士の比較を交え、インタビューの場における言動と、それ以外の場とのギャップを補いながら考察していく。

### 第 3 章 理想化された恋愛

#### 第 1 節 恋愛の理想化と当然視

あるパターンの行動や考えを含む恋愛の存在はしばしば自明なものとされ、さらに恋愛という現象の存在を肯定する価値観の広まりが確認された。

インタビュー協力者には恋愛を身近に感じる人だけでなく恋愛が何かわからないという人も複数名含まれたが、恋愛が存在しないとする発言はなかった。また、記念日を祝うなど世間で一般的とされる恋愛行動に則ることを重視する「 temple 型恋愛（H、I、J、K）」が広く浸透しているという指摘なども見られた。特定の行動や考えが一般的な恋愛のパターンとされ、社会通念として広まっていることがわかる。自身が恋愛を身近に感じる度合いが恋愛の概念の認識に無関係であり、特定のイメー



ジが一般的恋愛として多数者の間で共有されていることから、社会的につくられた概念の内面化により恋愛は認知されるものだということが推察できる。

近年はリスク化や草食化など恋愛のネガティブな面が着目され、恋愛離れが進んでいると前述したが、実際のところ恋愛は望ましいものとする価値観が広く見られた。アンケート調査では、「恋愛することにポジティブなイメージがある」という項目において、回答者の75%が肯定（「そう思う」、「少しそう思う」）し、性別で見ると男性8割、女性7割強、その他約半数が肯定した。恋愛の指向の観点から見ても、同性愛を除いた他全てで半数以上が肯定しており、多くの大学生が持つ傾向だといえる（図2）。また、「周りが恋愛をしていたら、羨ましく思う」という項目は全体の7割が、「恋愛はした

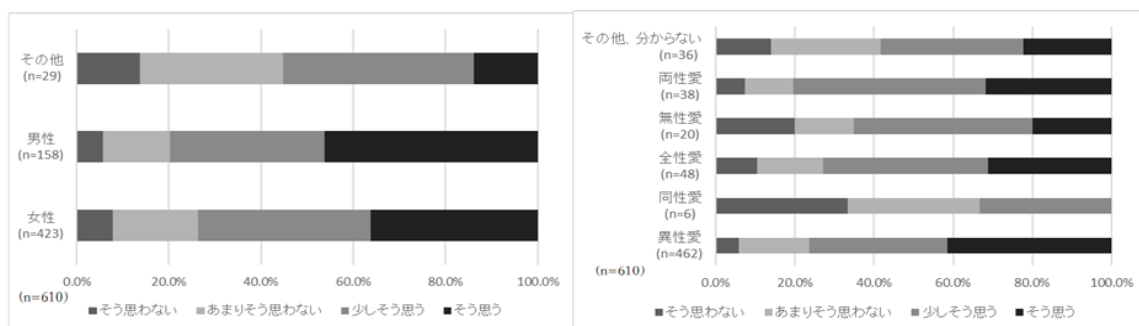


図2 「恋愛することにポジティブなイメージがある」

方がいい（＊）」という項目については約6割（58.7%）が肯定した。「理想的な恋愛のイメージがある」という項目では男女ともに約6割が、「理想的な大学生には恋人がいる（＊）」という項目では男女ともに約4割が肯定した。大学生は、恋愛をポジティブで理想的なものと捉えているだけでなく、恋愛をしている状態を羨ましいと考えるなど、恋愛をしていない状態よりもしている状態を望ましく考える傾向から、恋愛の理想化がなされていることが窺える。

社会通念として構築され理想化が進んだ恋愛行動や考えの内面化により、恋愛をポジティブなものとして当然視すること、すなわち恋愛至上主義が一般的だとされている。

## 第2節 恋愛の特別視

インタビュー調査において、「友情って認識するか、恋愛って認識するか（A）」、「恋愛と友情（P）」など、恋愛はほとんどの場合友情と対比して語られ、両者を比較して恋愛のみが特別視されていることが明らかになった。

独占欲を抱く、性的関係を持つなど、恋人に対してのみ許される行為があるという意見はたびたび聞かれた。例えば協力者Eは、「すごく束縛のきついカップルやったら、毎日連絡して、毎日電話したり、なんか、毎日顔を見な心配みたいな。そういう友達もいるやろうけど、それを世間的に見て、あ、友達やから大丈夫やなっていうより、恋人やから大丈夫やなっていう認識をされることが多い」と述べた。アンケート調査においても、「恋愛ほ

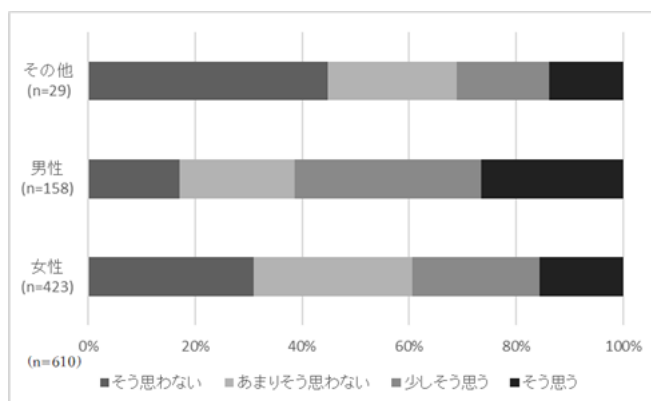


図3 「恋愛ほど強い感情的結びつきを得られるものはなかなかないと思う」

ど強い感情的結びつきを得られるものはなかなかないと思う」という項目で、男性の約6割、女性の約4割が肯定していた（図3）。友情では許容されがたい関わりが恋愛においては認められ、実際に恋

愛を通して強い結びつきを得ている人が多いことがわかる。

他方、深い関係性やつながりの希求は友人関係においても存在するように見受けられた。「ふつう、友人など恋人以外の人に独占欲を向けることはしない(\*)」という項目では男性の約3割、女性の約5割、その他の約4割が否定した。「友人関係など、恋愛以外の関係において他者に介入してほしくないと感じることがある」という項目でも半数以上が肯定している。また、「友人関係など、恋愛以外の関係において愛情を強く感じる」という項目では女性の約8割、男性とその他の7割が肯定し、特に「そう思う」と答えた大学生は女性で52%、その他で58.6%に上った。恋愛以外の関係性を考えるとき、協力者の想定としてそれが友人関係にとどまらない可能性もある。インタビュー調査においても、恋愛以外の関係として、友達に加え家族に言及する場面がごくまれにあった。ゆえに、アンケート調査におけるこの間いでも、友人関係以外の関係が想定された可能性はある。それでも、多くの大学生が友人関係を含む恋愛以外の関係において強い精神的つながりを求めていることは確かだ。この点だけに着目すると、個人の求める関わりは恋愛関係とそれ以外の関係との間であまり差がないようにも思える。

では、どうして恋愛のみ、特別視されるのだろうか。この疑問を考える上で重要と考えられる発言が、グループ・フォーカス・インタビューにおいて見られた。恋人以外の関係性において独占欲を抱く場合があるのではないかという議論に関連して、次のような発言があった。

「私の一番の友達」みたいな、それを端から見ていると、何か特別な感情を抱いているんじゃないかなっていうふうに外からは見えてました。同性同士の友達、女の子同士で、たぶんお互いに恋愛と思ってやっているわけじゃないけれど、片一方の子がべったりくっついて行ってるのを見たときに、好きっていうか、ちょっとうちらとは違う雰囲気だよっていうのはある。(略)「ふつうに仲いい友達」よりは、独占欲というか何かちょっと違う欲求、感情みたいなものが渦巻いているように端から見えていたら見えました。(N)

当人たちが恋愛関係と考えていないだろうとしたうえでなお、独占欲のような感情を抱く親密な間柄を、自分の認識する友情とは違うとしている。さらに、行動の理由を友情以外のものに求めている。このグループ・フォーカス・インタビュー内では友情と恋愛が対比して語られていたことを踏まえると、その「同性同士の友達」は恋愛関係にあるのだと協力者Nは暗示している。Nの発言に対し他の協力者は疑問の声を上げることはなく、それどころか感心するかのようなため息が全体的に聞かれた。行動主体者の意思とは関係なく、友情として容認されない行動を判別し恋愛行動と解釈することは認められているようだ。

束縛など人権侵害につながりやすい、ふつうでないとされる行為や感情が、恋愛においてのみ許容されている。さらに、恋愛関係でない間柄で親密な関わりをすることは許されず、その行為の主体らは恋愛関係にあるのだと勝手にみなされてしまうこともある。

このため、自己が肯定され幸せを感じる手段として恋愛を求めるのではないか。恋愛以外の関係性においては容認されない深い関わり、精神的・肉体的つながりが恋愛においては許されるので、恋人からは特別自分が大切にされるものだと感じる。実際、半構造化インタビューの中では、恋愛によって自己肯定感が上がると過半数が答えた。協力者Cも、恋愛で自己肯定感が上がると語った1人だ。「好きだよとかかわいいとかかっこいいとか言われたらなんか自分に価値があるように思えるじゃないですか。ほとんどの人って彼氏とか彼女とか一人しかいないと思うし、なんていうか唯一無二な感じが特徴」と述べた。唯一無二の存在として感じられる恋人は、明確な言葉をもって自身を肯定す

るため、自分の価値を感じられるとしている。

逆に、恋愛をあまりせずその特別性を強く感じない協力者 E は、他者が恋愛する理由を「肯定してくれる存在が欲しいんじゃないか」としつつも、「別にそれを恋人に求めなくてもいいんじゃないか」と言った。恋愛の特別性を強く感じていないため、恋愛だけが親密な関わりを許すという想定がなく、このような発言に至ったと解釈できる。したがって、恋愛という保障により許される親密な関わりから得られる充足が、人々が恋愛を求める大きな理由だといえよう。

### 第3節 根強いロマンティック・ラブ・イデオロギーの存在

多くの大学生の意識の中で、ロマンティック・ラブ・イデオロギーはまだ存在しているという結果となった。

アンケート調査で「結婚するなら恋愛結婚がいい(\*)」という項目で約 9 割が肯定的に答えており、恋愛から結婚への流れを多くの大学生が望んでいた。一方で、「結婚は、恋愛のゴールだ(\*)」という項目は約 8 割が否定していた。恋愛と結婚とのつながりに関しては、恋愛の正当性を結婚につながるかで判断するロマンティック・ラブ・イデオロギー的な考え方はほとんど見られず、ロマンティック・マリッジ・イデオロギーへの移行が見られた。要するに恋愛自体は結婚と必ずしも結びつく必要はないが、結婚を考えると恋愛がその前にあるべき、あるいはあってほしいと考えているのである。その理由について小林・川端 (2019) は、「ロマンティックラブは衰退していき、恋愛は結婚から解放された。結婚なき恋愛も自由に行えるようになった。しかし、一度ロマンティックラブを経由してしまったために、結婚と恋愛の結びつきだけは強固に残ったのではないか」(p. 66) と述べている。性的接触も、恋愛関係において独占されるべきだとする考えが根強く見られた。「恋愛関係にある同士なら性的関係を持つのはふつうのことだ(\*)」を 65% が肯定するなど、恋愛関係にあれば性的関係を持つということを当然視する傾向があった。また、「自分の愛する人の子どもを持ちたい」には 75% が、「結婚したら性的関係を持つのはふつうのことだ(\*)」という質問には、70% が肯定的に答えた。このことから、恋愛相手と結婚し、性的関係を持つ、転じて子どもを持つという関係性が成り立っていることがわかる。

その反面、「恋愛関係にない人とは、ふつう性的関係を持たない(\*)」という項目では男性の約 6 割、女性の 4 割、その他の 8 割が否定するなど、性別によって大きな差があるものの、性的関係を持つ相手は恋人であるという考え方が薄れている現状も見受けられた。インタビューにおいても同様の傾向が確認され、ロマンティック・ラブ・イデオロギー的思考を否定する発言が何度か見られたが、その発言の背景にはこの排他的な関係性を当たり前とする考え方が存在した。恋愛と結婚とのつながりを否定する回答者 N は、「結婚まで行きたいという欲がないから、別れる前提で付きあうしか発想がない(略) 恋愛関係から結婚に行きたいっていう気持ちもない(N)」と述べた。この発言は、社会通念において結婚と恋愛とが強く結びついていることを明示している。また、協力者 A は、もし結婚したらそのパートナーとの子どもを産むのではなく「身寄りのない子をもらいたい」と言った。自身は他者と性的接触をしたいと思ったことがないが子どもは欲しいと表現した上での発言だったが、パートナーに「こんな残酷な価値観を突き付けることはできないかもしれない」とも述べた。結婚相手とは性的接触を持ち子どもを持つものだという考えがあるために出た発言である。またここでは、恋愛し結婚につながる相手が異性であることが前提とされており、異性と恋愛をすることを当然視する異性愛主義が一般的であることを意味する。さらに、恋愛は「どっちかというと気持ちのつながりで、セックスは体のつながり」であり恋人と性的関係を持つ相手は必ずしも一致しないという協力者 N は、その考えを「外で言うとなぶくずしだらだって言われる」と話した。この発言には一般的に恋愛関係

においてのみ性的接触は許されると認識し、しばしば意思表示を控える現状が窺える。恋愛、結婚、性的関係は今なお強く結びついており、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを支える基盤として結婚制度の存在があることが明らかになったといえよう。

## 第4章 隠された多様性

### 第1節 曖昧な恋愛概念

恋愛は多様なものとして認められており、その全体像が語られることはない。例えば恋人の説明として、嫉妬心を抱くきっかけとなる人、長時間ともに過ごしたい相手、密接な接触を求める相手、少女漫画のようなときめきを感じる相手、自分の話を聞き成長させてくれる人など多様な意見が聞かれ一貫性はなかった。恋愛の説明も、自己肯定感を上げるもの、本能的なもの、あこがれの対象など断片的で多岐にわたった。それだけ恋愛は幅広い事象や状態と解釈されるものであるといえよう。しかし、グループ・フォーカス・インタビューにおいて話始める際に自ら恋愛の定義付けを行い、その場での共通理解を求めたのは、協力者Nの1人だけであった。曖昧な認識のまま恋愛を語ることはほとんどの人にとって一般的であり、違和感を持つことではないようだ。あるいは、恋愛に関して共通理解を得られると考えていない可能性もある。

恋愛は確かに存在するのだと感じたり強い憧れを抱いたりする協力者には特に、何をもってそれを感じるのか重ねて問うてみたが、明確な回答は得られなかった。数年前まで恋愛の特別性を強く感じていたがインタビュー時点でそれほど感じていなかったという協力者Dは、恋人を「何で決めてたんやろってくらい何も考えてなかった」と振り返った。当時はドラマや漫画のような「いわゆる恋愛」をしており「人に言えへんようなキュンキュン」を感じ、ちょっとした言葉や行動に「かつこいいみたいな感情がおのずとわいて」いたが、今となっては全く理解できず不思議だとしていた。

確かに存在する感覚・感情として個人により恋愛は認知され、言語化して特定の状態としてその存在自体を人と共有することはない。この特性のために、個人が自分の感情や行動のうち恋愛と呼びたいもの、恋愛と呼ぶにふさわしい、都合がよいと自認するものを恋愛と名付けており、恋愛の多様性につながっていることが推察できる。

### 第2節 恋愛の語り方

#### 第1項 歓迎型表現

インタビュー協力者が、多様で漠然とした恋愛に関しても行う話し方や態度も様々であったが、大きく三つのパターンに分かれた。

一つ目は、基本的に恋愛をポジティブなものと捉え歓迎する態度が示されるときに用いられる表現で、これを歓迎型表現とする。恋愛に関する特定の考えが社会に普及していることを認め、その考えから外れる他者を異質だと表現する。

歓迎型表現を使用することが多い協力者は、自己の意思と恋愛規範との衝突が比較的少ないと思われる。そのため、「別に楽しそうにしてるしいんじゃないか(B)」、「その人がいいならその方がいい(C)」といったように、恋愛する主体が望む行動を尊重すべきと言うことが多かった。自身と他者との恋愛行動のギャップを認識しているが、他タイプと比較してギャップへの言及や、自分自身の恋愛に関する分析をすることが少ない。

一例として、自分の周りに「恋愛に興味ない人」が多いことへの驚きが表現された会話文を挙げる。

C: 実際に恋愛に興味ないって言ってる人もいるし、たぶんなんか、見た目とかふつうにかっこよ

かったりかわいかったりするのになんか、20歳とかそこらへんでも今まで彼氏彼女いたことないって言うてる人もいるしでなんか不思議ですね。

筆者：不思議。

C：たぶん、どうかな、ふつうに皆さんそこまで、てかそこまで深く関わってはないですけど、性格はそこまで悪くはないし、見た目もそこまで悪くないし、ふつうに異性から声かかることはあると思うんですけど、ううん、そうですね、それが不思議。

ある程度の年齢になったら異性と恋愛するという一般的な恋愛規範に共感するところが多く、規範に反する他者の行動に疑問を持っていることがストレートに表れている。この会話ののち、自身に関しては「恋愛がどんな状況、状態かわかってなくても声かけられたら全く無知な状態だったら、どんな感じなのかなと思ってふつうにのっかってしまいそう」であり、「中学のときと違ってほんとに恋愛というよりも好奇心の方がなんか大きかった」と述べた。自分の恋愛行動や考えに対する意味付けやその原因分析は行われていない。自分と他者の恋愛行動や考えに差がある理由を他者に求め、自己批判には至っていないことがわかる。

## 第2項 適応型表現

二つ目は、一般的恋愛の広まった環境に適応しようと試み、頻繁に他者の視点を意識しながら行われる表現であり、これを適応型表現とする。恋愛に関する特定の考えが社会に普及していることを認め、その考えと自己の状態との間にあるギャップに着目し、ギャップを抱える自分を異質だと表す。

この表現が用いられるとき、友達の発言に言及するなど、他者にとっての恋愛を自身のそれと異なる存在と捉え時間をかけて語り、自身の考えについてはしばしばネガティブイメージを伝えるといった行動が見られた。普段から一般的な恋愛と自己との間にギャップを感じており、ギャップに向き合わざるを得ない状況の人が選びやすい表現かと思われる。実際に適応型表現を頻繁に用いた協力者はいずれも恋愛感情を抱いたことがない、もしくは他者と比較してほとんど恋愛をしない人であり、普段から恋愛について語るときに他者との違いを意識する場面が多かったと考えられる。

恋愛とはどのようなものだと考えるか、筆者が問うた際に行われた以下の会話文において、適応型表現が見られる。

E：マジョリティーが楽しんでるものってイメージ。

(略)

E：連絡が来ないとか、たしかに二股されたとかさ、そういう話は聞くけど、なんか、結局はその相手と自分の関係がより親密になっていくことを楽しんでるイメージかな。

筆者：うん。

E：これを言うによくひん曲がってるって言われるけど。

筆者：ひん曲がってるって言われる？

E：言われる。もっと楽に考えたらいいのになんて言われたことが、正直、よくある。

筆者：それは恋愛に関して。

E：恋愛に関してです。

筆者：楽に考えたらいいのに。

E：だから重苦しく、固く考えすぎてるって捉えられることが多い。だからマジョリティーって言うようにしてる。

自分を含めずマジョリティーである他者のものとして恋愛を捉え説明し、それと比較して他者の言葉を用いながら自分の恋愛観にも触れている。「重苦しく、固く考えすぎ」という言葉を、Eはポジティブに捉えてはいないが反論するわけでもなく、そのように受け取られることを事実として受け入れ理解に努める様子が見られた。

他にも、結婚しても性的接触を好まず一般的恋愛にあてはまらない自らの考えを「残酷な価値観(A)」とする発言、「私は『なんで』ってなっても、多数派が『仕方ないことなのよ。これはこうなのよ』っていうことに関しては、『そうなんだ』って思い込むようにしてる(E)」といったことが聞かれた。

他者の行動規範や決まり事は自身のコントロールできるところではなく、それをそのまま受け入れた上での行動を重視する。他者から自身の考えが「ふつう」ではなくまれなものだと捉えられる場面が多い状況下で、できるだけ心地よく過ごしていくために獲得した考え方ではないかと思われる。

### 第3項 分析型表現

三つ目は、恋愛行動や考えについて曖昧な理由で批判を行うのではなく、論理的な分析や再考をしながら恋愛を語る表現で、これを分析型表現とする。恋愛に関する特定の考えが社会に普及していることおよび、その考えと自己の状態との間にあるギャップに着目しながら、誰しもギャップを持ち得るとする表現だ。すなわち、恋愛についてある考えが一般的とされているものの、人それぞれ全ての恋愛に違いはあり、実のところ一般的な恋愛というものは存在し得ないとする。

分析型表現を用いる協力者は、他者のみならず自己の恋愛観まで深く分析し、一般的な恋愛観や、それが生まれる要因となっている社会制度まで批判した。以下はその一例で、「ドラマとか映画とか」で見られるような「キュンキュンした気持ち」としての恋愛について述べられた意見である。

イメージみたいなものが、それこそメディアとかマンガとか、そういうところから得ているけど。なんか考えてる人って、たぶん私にとっての恋愛じゃないとか、私にとっての結婚関係ってどんななんだろうみたいなのを考えて選んでいるからこそ、あんまりこういう関係っていらんのじゃないのって。(D)

多くの人がメディアにより発信される、時に理想化された恋愛観を内面化し、それに従い行動をとっていると指摘している。また、それを内面化していない人は、自身の必要とする恋愛や結婚のあり方を考え選択している。その場合、他者から与えられる恋愛のイメージは自己の恋愛の仕方に対して決定的な影響を与えることがない。

協力者Dは「一般的な恋愛」の内面化に理解を示しつつもネガティブなイメージを表現しており、メディアで表現される、恋愛関係が特別なものとする考えに賛成しなかった。さらに、その考えから脱却する手段として、「考える」ことを重視する傾向にあった。

このように、恋愛に対する態度は個々人の考えや環境の影響を受け、多様なものとなっている。ただし、グループ・フォーカス・インタビュー協力者は、それぞれが他の協力者の影響を受けて表現の型を流動的に変化させており、ひとりひとりを三つのカテゴリーのいずれかに分類するのは困難であったため、表中(第2章第3節第1項)に記載を避けた。

### 第3節 表現されない多様性

以上からもわかるように、確かに恋愛に関してとる考えや態度は多様であるが、それらの多くはあくまで考えを述べたものであり、必ずしも言動に反映されていない点は注意しなければならない。

これは、アンケート調査結果においても確認された。第1章第2節において述べたとおり、近年の調査では個人の自由と多様性を認めていこうとする社会的風潮が明らかになっている。実際、「セクシュアリティはグラデーションである」や「日頃、ステレオタイプな性別のイメージにとらわれないようにしている」という項目については、女性の8割、男性の7割、その他の9割の大学生が肯定した。それぞれの意識の中では、男女二元論的思考にとらわれず多様性を認め、かつステレオタイプの思考をなくそうと個々で努力しようとする動きが見られた。

一方で、「恋愛ソングに共感することがある」の項目では女性の65%、男性・その他の約半分が肯定した。ステレオタイプな恋愛概念を助長すると思われる習慣に関しても、「恋愛テクニックを調べたり実践したりしたことがある」の項目では女性の約5割、男性とその他の4割強が肯定していた。メディアの中にある、男女二元論的な極端な女らしさ、男らしさを求めた恋愛に共感したり、そのような恋愛に関する情報を積極的に求めたりしたことがある人が一定数いるということだ。ステレオタイプの思考から脱却しようとしているにもかかわらず、そのような考えを前提としたコンテンツを歓迎する態度には一貫性がなく、意識が行動に十分に反映されていないことがわかる。

個人の考えや意識のレベルでは多様な恋愛も、言動ではステレオタイプなものになりがちであるようだ。

## 第5章 恋愛至上主義の再生産

### 第1節 現存する恋愛至上主義

恋愛に関する考えや態度は多様であり、恋愛至上主義に基づいた一般的な恋愛観念にあてはまらない人が多数いるのは想像に難くない。今回のインタビュー調査においても自他の恋愛をそのまま受け入れる協力者は全くおらず、ステレオタイプな恋愛に関して指摘する違和感も多様であった。

違和感の対象としては、性交渉や恋愛・結婚・出産を一つに結びつけ、普遍的幸せとする価値観、転じて恋愛経験の有無で人を評価付ける価値観、恋愛行動を期待されるプレッシャー、異性愛主義などが挙げられた。少女漫画で描かれるような恋愛にあこがれるという協力者Aは、恋愛は自分の意思と関係なく「してしまう」ものであるという考えから、自分の意思で能動的に「恋人をつくる」ということに違和感を抱くと指摘した。

中でも多数の協力者により指摘されたのは、恋愛を当然視する価値観であった。特定の人自身に魅力を感じて恋愛をするのではなく自身が恋愛している状態に魅力を感じたり、恋愛を一種のステータスと捉えたりする人同士が、自己実現の一環として恋愛を行うことがしばしばあるという。これは、恋愛が全ての人にとっての幸福だとする恋愛至上主義を反映して生じる価値観だ。

恋愛に関する問題のうち特に深刻なものとしては、デートDVがたびたび上がった。デートDVとは、特に恋愛関係における二者間や別れた恋人間の支配/被支配関係、虐待状況、主体性の侵害のことでとされている(伊田, 2010)。男性は支配的な方が性的魅力があるなど、理想化された恋愛のイメージに基づくプレッシャーが生じたり、いかに理想的恋愛を行っているかという観点から不本意に他者と比較がなされたりする。これは傷つきやショックの原因となり、理想的恋愛をしなければという強迫観念にもつながり得る。また、加害者・被害者ともに恋愛を当然視した結果、いやな思いをしたりさせたりしても気づかない、気づいても愛情表現だからと過度に受け入れてしまうといった事態が起こる。

協力者Cは、以前恋人であった相手が後をついて来たため、家に帰れなかったという経験を語った。

「向こうは恋愛と思ってるかもしれない」が、インタビュー協力者自身は「これ恋愛じゃないのかもしれない」、「デート DV ばい」と感じたという。元恋人は協力者の意思に反したことを一方的に行い協力者 C の 行動制限をしており、この行動は明らかにデート DV と考えられる。それでも、協力者 C は「かもしれない」「ばい」といった表現を用い断定を避けている。歓迎すべき行為ではなくても、恋愛の一環として過度に他者を受け入れてしまうことに加え、自分の意思に従い拒否することの難しさが窺える。

漠然とした恋愛概念は明確に言語化されておらず、常に話し手・聞き手や恋人同士の間には、想定する恋愛像のギャップが生まれる。そこに理想的恋愛像も合わさり、実情を無視した言動がしがばしば個人のあり方を否定するとともに、理想的恋愛像を強化していく。恋愛に対する違和感と協力が語るほど広く感じられているにもかかわらず、理想的恋愛像はほとんど変化・崩壊することなく厳然と存在していることが明らかになった。

## 第2節 恋愛至上主義の生み出す苦痛と再生産

自分の感覚が一般的な恋愛観にあてはまらないとき、苦痛を感じ得る。恋愛至上主義や、男女二元論、ロマンティック・ラブ・イデオロギーをもとにしたステレオタイプの恋愛観に対して、性別や恋愛志向にかかわらず多くの大学生が苦痛を感じていることが、アンケート調査を通してわかった。ただし、苦痛を感じる割合の差は存在し、特に多数派となりにくい人たちがその苦痛を感じやすいことが明らかになった。

5つの項目（恋愛、結婚、子どもを持つこと、異性愛、恋愛関係であれば性的関係を持つこと）の当然視を苦痛と思うか尋ねたところ、苦痛を感じると回答した割合は全ての項目において、その他＞女性＞男性という関係性が成り立った。さらに、性別をその他とした協力者の回答のみに着目すると、全項目で8割以上が苦痛を感じていた。性別その他の協力者たちは、アンケート回答者の性別割合（第2章第3節第1項参照）からわかるように、女性、男性と比べて圧倒的に少ない。それに加え、唯一異性愛以外の恋愛志向が過半数を占める性別でもあり、男女二元論的で異性愛主義の社会で多数派になりにくい。社会的なマイノリティとされる人が、特に恋愛至上主義に苦痛を感じやすいのであろう。

男女間で比較した場合にも、男性より社会的に立場が弱いとされる女性の方が苦痛を感じている割合が高く、同様のことがいえる。恋愛を当然視されることが苦痛だと答えた割合には、あまり男女差は見られなかった。しかし、「結婚することが当然視されるのは苦痛だ」という項目では女性は約75%が肯定する一方で男性は57%が肯定するなど、それ以外の4項目では約2割の差が表れた。男女間で恋愛にまつわる考えの大きな差が存在しており、女性の方が男性よりも苦痛を感じているということがわかる。この理由としては、女性の方がより恋愛至上主義に基づく行動を期待される場面が多いということが考えられる。例えば幼児期から、魅力的なお姫様が王子様と結婚するプリンセスストーリーを聞いたり、親戚などによって結婚や子どもを持つといった行為に関連する話をされたりといったことがある。このような環境の中で、女性の方がステレオタイプな恋愛を疑問視する機会を得やすい現状があると思われる。

以上のことより、社会的マイノリティとなりやすく日頃恋愛至上主義や性別規範によって行動に制限をかけられる等のプレッシャーを感じている人ほど、恋愛至上主義に対して批判的になりやすいことがわかる。また、一般的恋愛に対し違和感を抱き苦痛すら感じる人がいる一方で、恋愛至上主義に違和感を持たず受け入れる人たちがいると言える。

ただし、他者に苦痛を与え得るのはステレオタイプな恋愛観に疑問を持たない人だけではない。ア



ンケート調査では、恋愛至上主義に基づき他者を不快にさせ得る行為として、「相手に恋愛の話をしよう急かしたことがある」「恋愛を話のタネに人をからかったことがある」という二つの項目を尋ねた。前者の項目を肯定した人のうち、「個人的な会話をするとき、話したくもないのに恋愛の話をしよう促されたことがある」人は 57%であった。自身が他者に行う行為を他者からされた場合、半数以上が不快感を持ったり苦痛を感じたりしていることを示している。自分が好ましく思わない言動を他者にとってしまう背景には、時間をかけてメディア等をつうじて形成・維持し続けられる恋愛至上主義がある。マイナスイメージとともに恋愛至上主義的言動を意識していたとしても、ふとした場面で内面化された恋愛至上主義が表現される。それだけ、恋愛を当然とする価値観が浸透しているといえよう。

### 第3節 語りの同調圧力

#### 第1項 語りの抵抗

恋愛至上主義が多くの問題を引き起こしながらも恋愛のイメージがなかなか変化しない最大の理由は、一般的でない恋愛を容認しない同調圧力ではないだろうか。複数の協力者が、一般的な恋愛に含まれないとされる考えや行動について話したいが話せない、もしくは話したことがあるが理解されずやめてしまったと語った。

一般的でない恋愛について話すためには、相手やタイミングを選ぶ必要がある。グループ・フォーカス・インタビューでも、場の雰囲気によって語られる内容に大きな違いがあった。例えば、恋愛の指向をカミングアウトする場面において違いが観察された。以下、それに関連した発言を紹介する協力者を X, Y, Z と仮に名付けて説明したい。

一般的な恋愛に疑問を呈することが多く、ほとんど男女二元論に基づいた議論が行われなかったグループがあった。そこで、協力者 X から他の協力者に、恋愛対象の条件にジェンダーは含まれないのかという質問が投げかけられた。被質問者 Y はアンケートにおいて異性愛者だと回答していたがそれを肯定し、異性以外も自身の恋愛対象であると暗示した。

それに対し別のグループでは、カミングアウトをしかけてやめたと思われる場面があった。一般的な恋愛への疑問・反論が比較的少なかったグループで、自己批判や分析もあまり行われていなかった。全性愛と答えた協力者 Z が、身近な話からはいって、他者の反応を見ながらセクシュアリティの多様性について説明をした。しかし、他の協力者は同意や反対など明確な意思を示さず、感心や困惑とともに曖昧な相槌を打つのみだった。異性愛が当然だと解釈され得る態度が広く見られたため、協力者 Z はまとまった主張をすることなく話を終了し、カミングアウトもなされなかった。

前者の例においてはアウティングや冷やかしの心配がないアンケート調査において異性愛者としていた Y が、特に葛藤も見られず、両性愛者や全性愛者などと解釈される発言をした。それに対し Z は恋愛の指向について語るための工夫と捉えられる話をしておきながら、自由な自己表現がかなわなかった。もちろん協力者自身の性格等は言動の差に大きな影響を及ぼしているだろうが、他者の反応、それまでに行われてきた議論などを含めた場の雰囲気もまた強く影響しているのではないかと考える。一般的な恋愛を前提とした他者の言動により、自らの恋愛行動や考えを話しにくくなる。そして逆に、恋愛を分析する視点が多様な場では、それまでの自認とは異なる恋愛のあり方も考える余裕が生まれるのではないかと考える。

#### 第2項 理解されない語り

一般的な恋愛像への抵抗として自由な語りやその受容は大切だが、それだけでは不十分だ。自分の

恋愛行動や考えを話していいと判断された状況下においても、理解が得られるとは限らない。実際、理解されない様子は複数回観察された。以下の会話はその一例だ。

G：恋愛感情を持つ相手と結婚するのがふつうみたいな雰囲気ありますが、冷静に考えてみたら、好きだけじゃやっていけないような人生の山あり谷ありを全部、一緒に乗り越えていかなきゃいけない相手なので基本的には。何ていうんですか、ただ紙切れ1枚で、一生社会の目を鑑みて結婚してるだけの関係の人とか、もちろんいますけど。大体の人はともに家庭を持っていかなきゃいけないと思うので、そう考えると、それはなんか好きだから一筋で一緒にいられるかっていうと難しいんじゃないかなと思いますよね。

F：なんかお互いに与えあうものがあるっていうのと向かってきた壁に迫れる、迫っていけるっていうか、乗り越えていけるっていうのは、確かにまた別のような感じが。(略) なんか結婚って本当に義務が発生するじゃないですか。

G：そうですね。

F：本当に、結婚して婚姻届を出すっていう時点で、社会的にパートナーとして認められて、そこになんか財産分与とかもかかわってくるし。で、本当に親権だとかいろいろ。ま、扱いが違いますよね。

恋人っていった人と。

G：そうですね。

F：結婚してますっていう人と。

G：いや、ちょっと全然違うので、正直こう感情で結婚するとそんな、何ていうか個人的な意見ですけど、うまくいきそうな気配ないですよそれ、って思いますかね。

F：確かに。

恋愛と結婚はしばしば結びつけて考えられるが、その必然性はない。協力者Gは、法的に権利や義務が生ずる重要な決定において、きわめて曖昧で流動的な感情を根拠に持ち出す異様さを指摘している。さらに、その異様さを隠しむしろ理想とするロマンティック・ラブ・イデオロギーを批判している。それに対し協力者Fは恋人と結婚相手との比較をするのみで、恋人と結婚相手を結びつける異様さには全く触れておらず、Gの着目した論点とはいささかずれた話を展開している。この会話以前にFは、恋人を「本当に生涯の伴侶みたいな、要は人生のパートナー」との考えを表明していた。この点を踏まえると、Fはロマンティック・ラブ・イデオロギーを内面化し当然視していたため、Gの行った議論の重要な点を理解できなかったものと思われる。結婚相手が恋人と同じであるべきでないという、理解できた点のみから会話を広げようとしたのだろう。

一般的でない恋愛の話は誰を相手にでもできるものではなく、話すこと自体にためらいが生じやすい。そのため自信を持った主張がされにくいというのに、漠然とした恋愛概念としばしば対立し理解されないことも多い。拒否されたり、正確な理解を得られないまま会話を続けたりした結果、一般的でない恋愛の議論は深められることなく話題が変わってしまう。一般的な恋愛は語られる機会も多く理解されやすいのに対して、規範に捉われない多様な恋愛のあり方は語られる頻度が低く理解されにくい。広く認められている恋愛規範の強化が繰り返される中で、それに則らない恋愛は着目されず恋愛の多様性は広がりにくい。

恋愛は漠然とした概念であり、客観的な事象として存在を証明したり説明したりできないが、特別な確たるものとして広く認識されている。各個人の指す恋愛像はそれぞれの理想と現実を反映した多様なものであり、自身の恋愛と一般的なそれとの間、時には自身の恋愛行動や考えのうちにも矛盾をはらむ。しかし、その多様性はほとんど説明されることがなく、認識のずれ等の問題をしばしば引き起こす。一般的な恋愛と自己の矛盾やギャップによって苦しむ人は多く、時に特定の恋愛行動や考えの押し付けのために苦痛を与えたり与えられたりする。

また、種々の問題を引き起こしているにもかかわらず、恋愛という言葉は好んで用いられ続けている。それは恋愛関係にない人、特に異性の恋人以外と親密な関係を築くことを容認しない同調圧力のために、恋愛を必要とする人が多いからだと考えられる。友情関係における殊更親密な関わりは奇異なものとして許容されず、親密な関係を求めた場合は他者によって一方的に恋愛関係とジャッジされたり、拒否反応を示されたりする。したがって、堂々と肉体的・精神的に親密な関わりを求め、自己肯定感を高める等の効果を期待するときは、恋愛に頼ることがもっとも手軽で安心できる手段となる。

この同調圧力は行動のみならず会話においても働き、一般的な恋愛規範にあてはまらないとされる行動や考えを語りにくくさせている。それに加え、多様な恋愛は理解や共感に困難をとまなう場合が多いこともあり、恋愛至上主義は変化・崩壊しにくいという実情がある。

個人の活動や考えのレベルだと恋愛は多様化し、恋愛離れや多様化が進んでいるといえるが、他者との関わりにおいて恋愛はいまだ重要な意味を持つ。恋愛規範の理解と同調が期待されており、依然として恋愛至上主義は根強く残っていると結論付けられる。

自分の意思は関係なく、恋愛を重んじざるを得ない状況に置かれる大学生は数多いに違いない。恋愛という言葉や規範に捉われず、自分が他者との関係性において望む行為、感情を再考し、人間関係の可能性に気付くべきではないだろうか。

とはいえ、恋愛を共通概念と考えない言動へと移行していく上で本研究が役立つかと問われれば、疑問は残る。恋愛概念の内面化は、自己の理想的イメージが描きやすくなる、多くの人の間で共有される恋愛のイメージのためにコミュニケーションが簡略化されるといった効果も考えられる。そのため、恋愛概念が失われたとき、自己実現や他者との関わりの中で困惑することは大いにあり得る。何より、内面化した規範に自覚的になりそこから脱却することは、大変な困難をとまなうに違いない。従来の恋愛規範から逃れる際に生じる困難についての研究も求められよう。

## 参考文献

ギデンズ, A., 1995, 『親密性の変容 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』 (松尾精文・松川昭子訳), 而立書房.

伊田広行, 2010, 『デートDVと恋愛』, 大月書店.

伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子, 2002, 『女性学・男性学改訂版 ジェンダー論入門』, 有斐閣.

大塚愛子・堀田美保(編), 2001, 『現代文化スタディーズ』, 晃洋書房.

「おっさんずラブ」, 2016-, 放送テレビ朝日

<https://www.tv-asahi.co.jp/ossanslove/> (閲覧日: 2019年11月21日)

小林盾・川端建嗣(編), 2019, 『変貌する恋愛と結婚 データで読む平成』, 新曜社.

小谷野敦, 2000, 『恋愛の超克』, 角川書店.

棚沢直子・草野いづみ, 1995, 『フランスには、なぜ恋愛スキャンダルがないのか?』, はまの出版.

電通ダイバーシティラボ, 2019, 「電通ダイバーシティ・ラボが『LGBT調査2018』を実施 LGBT層に

該当する人は 8.9%、「LGBT」という言葉の浸透率は約 7 割に 」

<https://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2019002-0110.pdf> （閲覧日：2019 年 11 月 9 日）

内閣府, 2009, 「男女共同参画社会に関する世論調査」

<https://survey.gov-online.go.jp/h21/h21-danjo/> （閲覧日：2019 年 11 月 15 日）

中西祐子, 2018, 「現代大学生恋愛事情—ロマンティック・ラブ/コンフルエント・ラブ/草食化—」, 『ソシオロジスト』 20, pp. 31-47, 武蔵大学社会学部.

「逃げるは恥だが役に立つ」, 2016 年 10 月, TBS テレビ [http://www.tbs.co.jp/NIGEHAJI\\_tbs/](http://www.tbs.co.jp/NIGEHAJI_tbs/) （閲覧日：2019 年 11 月 21 日）

日本性教育協会(編), 2013, 『「若者の性」白書 第 7 回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館.

日本性教育協会(編), 2019, 『「若者の性」白書 第 8 回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館.

見田宗介・栗原彬・田中義久(編), 1994, 『縮刷社会学事典』, 弘文堂.

山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ 家族と愛情のパラドックス』, 新曜社.